

教科指導に関しては、事前指導で何回か指導案を書いたことが良かった。指導案作成の過程を通して、自分自身がどのような授業を作っていきたいかをイメージすることができた。事前準備の段階から、私は生徒が授業中にいろんな活動に取り組む授業を展開することを目指していた。その目標があったので、実際に実習校で授業計画を立てる際に、指導教諭の指導方法をそのまま模倣するのではなく、自分のアイディアを加えることができた。しかし、現場で中学生を相手に授業を行うと、私が考えた活動は無意識に英語が得意な生徒向けになっていたと気づいた。指導教諭からは、英語が苦手な子どもを重視すべきだとアドバイスを受け、学力の差を考える必要性を実感した。実習へ行く前は、楽しく、英語の楽しさを知ってもらえる授業を作りたいと思っていたが、実際に授業をしてみると、生徒が求めていることをもっと考えるべきだと感じた。ペアワークなどが多く、たくさん英語を話す授業スタイルを好む生徒もいれば、毎回同じペースで教科書に沿った授業を好む生徒もいるだろう。クラス内の生徒全員が満足できる授業を毎回行うことは不可能だが、様々なアプローチを日々考えなければならない。つまり、自分が良いと思う授業にこだわりすぎず、柔軟に授業に変化を加えるべきだと学んだ。

生徒指導に関しては、事前に何も考えていなかったが、結果的には教科指導よりも悩むことが多かった。私が担当したクラスには特別支援の生徒1人と不登校の生徒1人がいた。クラスの雰囲気は、男子を中心に元気な子が多く、女子は授業にも集中できる子が多かった。最初は私の方から話しかけることがほとんどだったが、2週目辺りから、生徒からもコミュニケーションをとろうとしてくれた。中学生らしく、楽しい雰囲気のクラスだったが、人と変わっていることを認められない年頃ということもあり、特別支援の生徒と不登校の生徒のことを積極的にサポートする場面はあまり見受けられなかった。例えば、遠足の班決めでは、その2人が取り残され、私はどう生徒に働きかければよいのかわからず、担任の先生に任せるかたちとなってしまった。先生は、生徒の思いやりの心に訴えかける方法で話を進めていた。私が担任だったらあの場面でどんな言葉をかけるのか、今も答えはでない。人のことを考えて行動することの大切さや、違いを認める姿勢を養うことができるように、普段から生徒への声かけを意識しないといけないと感じた。私にできることは限られていたが、実習最終日に私が見つけた一人ひとりの良いところを色紙に書き、プレゼントした。プレゼントには、人の良いところを見るようになってもらいたいという私の思いを込めた。今すぐにそうなれなくとも、彼らの人生のどこかで私の言葉を思い出してもらいたい。

教育実習を通しての一番の学びは、教師という職の素晴らしさだ。学校という場所は、毎日に変化に富んでおり、子どもの様子を毎日見ることが日課となった。実習が始まったばかりの頃は生徒の特徴もあまり知らなかったのですが、違いがあまりわからなかったが、日が経つにつれて個人個人の良いところがわかるようになった。1年間生徒を見ることができ

れば、1年の成長過程に私が携わることができると思うと、やりがいのある仕事だと改めて感じた。実習期間が終わりに近づいてきた頃、もっと生徒たちと過ごしたかったと思った。その時に、将来的に教職に就き、学校現場に戻ろうと決めた。その時まで、生徒にどんな風に育ってもらいたいかをしっかり固めておこうと思う。というのも、現職の先生方とお話をした時に、教師は生徒に対する思いを持ち、それを自信をもって生徒に語るができないといけない、という助言を受けたからだ。

生徒の成長に繋がることをしたいと思い、実習に参加したが、実際は生徒からたくさんのことを学ばせてもらった。最終日にももらった手紙には、「先生の授業楽しかったです。」「頑張って教師になって下さい。」などといったメッセージに励まされた。また、学校の先生方からは研究授業のご高評や教師をする上でのアドバイスをいただいた。現職の先生方の授業や生徒との接し方を見させていただいたことは大きな学びとなった。指導教諭を始め多くの先生方と生徒のおかげで充実した3週間となり、この出会いのおかげで教職の魅力を知ることができた。感謝の気持ちでいっぱい。ここで学んだことを忘れずに今後も頑張りたい。